

金文通解

伯唐父鼎

村上幸造

キーワード 射禮 饗祭 奉(拜) 臨 綵髻(勳) 蔑歷

器名 伯唐父鼎

時代 西周早期から中期 (◎『簡報』・穆王初年 (②劉雨)

出土 陝西省長安縣張家坡M一八三墓。灃河の西、現在の西安市長安区張海村の、鄆鄆嶺とよばれる東西約七〇〇米、南北二〇〇〇米の高台に、西周期の墓葬が数千あり、一九八三年から八六年にかけてその内の四百弱の墓を發掘した。M一八三からは、二五〜三〇歳と推定される男性遺骸とともに多数の副葬品が出土した。青銅器は伯唐父鼎を含む五件。(◎『簡報』による)

收藏 中國社會科學院考古研究所

著録

① 『近出』：劉雨・盧岩編『近出殷周金文集録』(中華書局、二〇〇二年)

第二冊・356

② 『新收』：鍾柏生等編『新收殷周青銅器銘文暨器影彙編』(藝文印書館、二〇〇六年) 698

③ 『簡報』：中國社會科學院考古研究所灃西發掘隊「長安張家坡M183 西周洞室墓發掘簡報」(『考古』一九八九年六期)

④ 『張家坡』：中國社會科學院考古研究所編著『張家坡西周墓地』(中國大百科全書出版社・一九九九年) 頁一三二〜一六七

⑤ 『銘圖』：吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』(上海古籍出版社、二〇一二年) 第五冊・249

考釋

① 張政烺「伯唐父鼎・孟員鼎廡銘文釋文」(『考古』一九八九年第六期)。後に、『張政烺文史論集』(中華書局、二〇〇四年) 頁七八四〜七八七、及び『張政烺文集 甲骨金文與商周史研究』(中華書局・二〇一二年) 頁二三四〜二三七に再録。

② 劉雨「伯唐父鼎的銘文與時代」(『考古』一九九〇年第八期)  
③ 劉桓「也談伯唐父鼎銘文的釋讀——兼談殷代祭祀的一個問題」(『文

- 博』一九九六年第六期）後に『甲骨集史』（中華書局、二〇〇八年）頁一四四～一四九に再録。
- ④ 夏麥陵「伯唐父鼎諸器與西周水射禮」（『紀念徐中舒先生誕辰二〇周年國際學術研討會論文集』巴蜀書社、二〇一〇年）
- ⑤ 賈海生「伯唐父鼎與麥尊所記禮典鈎沈」（『中國典籍與文化』二〇一二年第四期〔總八四期〕）
- ⑥ 袁俊傑「西周金文中的射牲禮儀——伯唐父鼎與辟池射牲禮」（『兩周射禮研究』（科學出版社、二〇一三年）第二章・第一節二、頁一五五～一六九）「伯唐父鼎銘通釋補正」（『文物』二〇一一年第六期）、および「論伯唐父鼎與辟池射牲禮」（『華夏考古』二〇一二年第四期）が基となっている」
- ⑦ 高澤浩一編『近出殷周金文考釋』二（研文出版、二〇一三年）伯唐父鼎
- ⑧ 王海・張利軍「伯唐父鼎與周穆王治理荒服犬戎」（『東北師範大學報（哲學社會科學版）』二〇一四年第一期）
- ⑨ 劉雨「西周金文中的射禮」（『考古』一九八六年第一二期）。後に『金文論集』（紫禁城出版社二〇〇八年）頁三～一四に再録。
- ⑩ 小南一郎「射の儀禮化をめぐる」（小南一郎編『中國古代禮制研究』（京都大學人文科學研究所、一九九五年）
- ⑪ 佐藤信彌『西周期における祭祀儀禮の研究』（朋友書店、
- 二〇一四年）第三章・第二節、頁九六～一〇一。
- ⑫ 楊華・要二峰「商周射禮研究及其相關問題——兼評袁俊傑著《兩周射禮研究》」（『史學月刊』二〇一五年第一二期）
- 語釋「饗」
- ⑬ 劉雨「金文中的饗祭」（『故宮博物院院刊』一九九八年四期）。
- ⑭ 董珊「它簋蓋銘文新釋——西周凡國銅器的重新發現」（『出土文獻與古文字研究』（第六輯）二〇一四年）
- 語釋「簃京」
- ⑮ 王玉哲「西周簃京地望的再探討」（『歷史研究』一九九四年第一期）
- ⑯ 盧連成「西周金文所見簃京及相關都邑討論」（『中國歷史地理論叢』一九九五年第三期）
- ⑰ 王輝「金文簃京即秦之“阿房”說」（『陝西歷史博物館館刊』第三輯、一九九六年）
- ⑱ 邵英「宗周・鎬京與簃京」（『考古與文物』二〇〇六年第二期）
- ⑲ 袁俊傑「簃京續考」（『兩周射禮研究』科學出版社、二〇一三年、第二章・附錄二・三、頁三四五～三五二）
- 語釋「奉」
- ⑳ 冀小軍「說甲骨金文中表祈求義的奉字」（『湖北大學學報（哲學社會科學版）』一九九一年第一期）
- ㉑ 來國龍「釋“迷”與“速”」（簡帛網、二〇一五年三月十二日に投稿掲載）[http://www.bsm.org.cn/show\\_article\\_list.php?sortid=5&ActionPage=3](http://www.bsm.org.cn/show_article_list.php?sortid=5&ActionPage=3)
- ㉒ 單育辰「釋饗」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心・學者文庫、

參考文獻

射禮および祭祀儀禮

二〇一三年一月二十三日) <http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/2004> 後に、『考古學報』二〇一七年、第五期に再録。

## その他

- ㉓ 寇占民『西周金文動詞研究』(綫裝書局、二〇一〇年)  
㉔ 武振玉『兩周金文虛詞研究』(綫裝書局、二〇一〇年)  
㉕ 武振玉『兩周金文動詞詞彙研究』(商務印書館、二〇一七年)  
㉖ 劉志基・董蓮池・王文耀・張再興・潘玉坤主編『古文字考釋提要總覽』(上海人民出版社、第二冊二〇〇八年、第一冊二〇一〇年、第三冊二〇一一年)

㉗ 鞠煥文「金文“蔑歷”新詁」(『古籍整理研究學刊』二〇一七年七月)

- ㉘ 陳劍「簡談對金文“蔑歷”問題的一些新認識」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇一七年五月五日) <http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/3039> 後に、『出土文獻與古文字研究』第七輯、二〇一八年五月、頁九一〜一一七に一部修正再録。  
㉙ 盛冬鈴「西周銅器銘文中的人名及其對斷代的意義」(『文史』) 第一七輯、一九八三年六月、頁二七〜六四)  
㉚ 松井嘉徳『周代國制の研究』(汲古書院、二〇〇二年) 第三部・第一章・第一節「排行」某父という稱謂、および第二節 稱謂のバリエーション

## 上古音は下記に示す

郭錫良『漢字古音手冊』(增訂本) 北京・商務印書館、二〇一〇年。

## 上古音の擬音は下記に示す

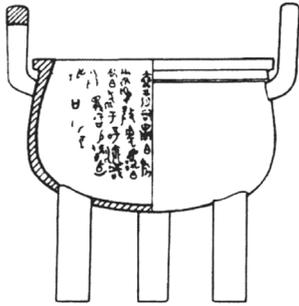
OCM : Schuessler, Axel (許思萊) *Minimal Old Chinese and later Han Chinese : a companion to Grammata serica recens* (ABC Chinese dictionary series / Victor H. Mair, general editor) University of Hawai'i Press, c2009  
B-S : Baxter, William H. (白一平) and Sagart, Laurent (沙加爾) *Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction, version 1.1* (20 September 2014) (order: by Mandarin and Middle Chinese) <http://ocbxattersagart.lsa.itsa.umich.edu/>

## 記號

(補足)、「筆者補注」〈器名〉【原文または譯文】その他通例に従う。

## 器制

器口は圓桃形、圓唇で、頸がすぼんでいる。頸側に二つ耳がつき、耳孔は長方形。頸部に凸弦紋が一周する。腹部は深く腹壁は中央部が最も膨らみ、三本のやや太くて長い圓柱狀の足がある。器底に煤がのこる。口徑18cm、腹徑22.4cm、腹深10.5cm、通耳高22.4cm、腹壁の厚みは0.6cm。(㊦『張家坡』による)



(B) 『新収』

銘文

拓本が不鮮明なため、確認できない字が多い。「」は文脈から類推した字である。内壁に九行、六六字、うち合文一字。

乙卯、王饗斝京、「王」

奉（拜）辟舟、臨舟龍（龔）、咸

奉（拜）、白（伯）唐父告備（備）、王各（格）

乘辟舟、臨奉（拜）白旂、

用射絳（勒）虎・貉・白

鹿・白狼于辟池、咸

唐父蔑（蔑）曆（歷）、易（賜）秬鬯一卣（卣）・

貝廿朋、對揚王休、用

乍（作）安公寶鬲彝、

乙卯、王饗斝京、

「饗」は何らかの祭祀と考えられ、金文に以下の用例がある。

〈土上卣〉集成 5421、5422（西周早期）

隹（唯）王大侖（禴、禔）于宗周、徂（徙）饗斝京年、

【唯れ王大いに宗周に禴し、徙きて斝京に饗せし年】

〔土上尊〉集成 5699・土上盃（＝〈辰辰盃〉）集成 9154 も同文

〈作册麥方尊〉集成 6015（西周早期）

雩若二月、侯見于宗周、亡述（尤）、迨（會）王饗斝京、彫祀、

雩若翌日、才（在）壁（辟）黼（雍）、王乘豸（于）舟、爲大豊（禮）、

王射大彝(鴻)禽、侯乘豸(于)赤旂舟從、死(司)威、

【雩若に二月、侯 宗周に見え、尤亡し、王の禋京に饗し彫祀するに會す。雩若に翌日、辟雍に在りて、王 舟に乗り、大禮を爲す、王 大鴻禽を射るに、侯は赤旂舟に乗りて從ふ、司威はる】

〈小臣靜卣〉新收 1960 (西周中期)

佳(唯) 十又三月、王饗禋京、小臣靜卽事、

【唯れ十又三月、王 禋京に饗し、小臣靜 事に卽く】

〈戍壘鼎〉集成 3708 (殷)

佳(唯) 王饗鬻(管) 大室、才(在) 九月、

【唯れ王 管の大室に饗し、九月に在り、】

〈高卣〉集成 3431 (西周早期)

亞、佳(唯) 十又二月、王初饗旁、唯還才(在) 周、

【亞、唯れ十又二月、王初めて旁に饗す、唯れ還りて周に在り】

〈呂方鼎〉集成 3754 (西周中期)

佳(唯) 五月既死霸、辰才(在) 壬辰、王饗于大室、呂徂(徙)

于大室、王易(賜) 呂、

【唯れ五月既死霸、辰は壬辰に在り、王 大室に饗し、呂は大室に徙く、王 呂に賜ふ】

以上から、饗が祭祀の一つであることが知れる。⑬劉雨は、下記の「沈子它簋蓋」の内容から、新王が即位して、前王の位牌を宗廟にあらたに加え祭ることであるとす。ただし、字形は「饗」ではなく「紉」であり、「紉」にも隸定される。拓影は、であり、であり、の「饗」字の拓影 と形が似ており、「紉」と隸定することに問題はない

であらう。

〈沈子它簋蓋〉「沈子也」とも表記 集成 4330 (西周早期)

它曰、捧(拜) 頤(稽) 首、敢収(敏) 邵(昭) 告、朕吾考、令(命) 乃鵬(宣) 沈子乍(作) 紉于周公宗、陟(升) 下公、不

不紉、休同公克成妥(綏) 吾考、曰(以) 于顯顯受令(命)、【它曰く、拜稽首し、敢て敏しみ昭らかに告げん、朕が吾考、乃が宣

なる沈子に命じて紉を周公の宗に作さしめ、二公⑭董珊は「下公」と讀むを升せと。敢へて紉せざるにあらざらん。休たる同

公、克く吾考を綏んずるを成さんは、顯顯たる受命を以てなり。】

この「紉」を⑬劉雨は、「饗」の異體字とし、同意とみる。先に諸説を引いている。まず、郭沫若は「館」と釋し(〈臣辰盃考釋〉「臣

辰盃」は〈士上盃〉の別名)『金文叢考』人民出版社、一九五四年)、次に、陳夢家は、「居」と釋した(「士上盃考釋」『西周銅器斷代(二)』

のは、祭禮の内容と合わない。三番目に、于省吾はこの字を、甲骨の「簋」と同字としたが詳細は未詳(「釋簋」『甲骨文字釋林』中華書局、

一九七九年)頁四〇)という。それを受け四として、劉釗は甲骨文字

の「簋」を再度論じた(「釋甲骨文中从殳的幾個字」『第二屆國際中國古文字學研討會論文集』(續編) 香港中文大學、一九九五年、頁

一五三〜一七二)が、詳細不明なので「待考」とする。五番目に、唐蘭は「裸」(『西周青銅器銘文斷代史徵』中華書局、一九八六年)頁

一三三)と釋し、『說文』に従い灌祭とした。これを劉雨は、祭禮としては合うが、すでに「裸」字があり重複するとして退ける。最後に、

〈沈子它簋蓋〉の銘文は、死んだばかりの父に代わって宗廟において

先公たちを祭ったときの禱辭であり、周公の後人である沈子它が、「饗祭」を執り行ったことを述べるとする。

この論文に先んじて②劉雨は、〈沈子它簋蓋〉について、

沈子它の父が死ぬとすぐ、その神主（位牌）は昭穆にしたがい宗廟に加え祀り、その祖父・曾祖（二宮）の神主もまた昭穆に従い一つ昇級させる必要があるので、饗祭は宗廟の次序を調整する祭禮の一種であり、しかも必ずその父が亡くなったばかりの際に行わねばならない。王室の饗祭は必ず父王が世を去り、新王が位を継いだばかりの時に行わねばならない。【沈子它之父新死、其神主要按昭穆耐入宗廟、其祖父・曾祖（二宮）的神主也要按昭穆遞昇一級、故饗祭是一種調整宗廟次序的祭禮、且必行於其父考新死之際。王室之饗祭則必行於父王去世、新王初繼位之時】

續けて時代について論じていう。〈伯唐父鼎〉の形制が昭王初年より早いとはみなせない上に、かつ饗祭を紀年表示として使っていることから、昭王が南巡して返らず没した後、穆王が位を継いだばかりの時の事とし、銘文中の王は穆王であり、墓葬の時代とも一致する、と斷ずる。

なお、③劉桓は、「乙卯、王饗祭京」というのは、ただ紀日表示であって、紀年表示ではないという。たしかに上に干支が置かれているからには、紀日表示であるが、③劉雨の説に従えば、「饗」の語から新王即位初年と分かるので、紀年が表示されていることになる。また記述が連続することになるので、この射牲禮が「饗」祭の行事の一部を成すと見ることができるとする。ただし〈麥方尊〉では、翌日に射禮が行われ

ているので、別行事であるのかもしれない。

荖京の位置については従来様々に論じられているが、いまだその地望は確定していない。宗周に近接する地であったと考えられる。①佐藤では、今の西安附近にあったとし、そこでの儀禮が次第に行われなくなり、それに連れて廢れ、「京」とも呼ばれなくなったという。

〔王〕奉（拜）辟舟、臨舟龍（壘）、威奉（拜）、

ここから射禮の進行を描寫する。まず王が辟雍の舟に拜禮し船着き場に臨んだ。

〔王〕字は見えないが、文脈により「王」を補うのが妥當であろう。前掲のようにこの王は穆王と考えられる。

〔奉〕字は本銘文中に三例見え、四行目の一字を除いて拓本では不明である。①張政烺は、「𠄎」と「𠄎」とに从い、『説文』の「奉」〔一〇下・本部に、「疾也、从辵、夨聲、拜从此」とある〕であり、學者は多く「祓」と讀むという。「祓」は「拜」に同じで、福壽や加護を祈求する動作であり、また敬意を表す仕草である。また「𠄎」と「手」とに从う「擗」字は、「拜」の古字であるので、「𠄎」＋「𠄎」字を、「拜」と讀むのに問題はない。字形の隸定も「奉」のままより「拜」とする方が妥當であろうが、通例に従っておく。

③劉桓は、「奉祭」と呼んで「饗祭」と並ぶ祭名とする。本銘文において三度も出現する「奉」が祭祀の一種であるとは思えない。祭名ではなく、單なる仕草・動作と取る方が自然であろう。従って「饗祭」

と「奉祭」という二つの祭禮が同日に行われたのではない。

では、具體的にはどのような動作なのであろうか。「拜稽首」と連用されることから、稽首（額づく）とは異なる動作、あるいは稽首の前段階の動作である。『説文』十二上・手部には、「擗、首至地也」とあるが、段玉裁の注は、「首至手也、各本作首至地也、今正、首至地謂稽首」と訂正する。李學勤主編『字源』下（頁一〇五四）は、「拜は拱手して腰を曲げ、頭を手まで下げるが地までは下げない。今の『擗』である」と説明する。日本語の「おがむ」は、體をかがめてお辞儀をする仕草、あるいは合掌を意味する。

なお②來國龍はこの種の字形を「𠄎」と隸定し、この字形は祭祀で用いる麥束を表し、後世「齋」「齋」「𦉳」「𦉳」と書かれたという。また同形の字の用例に、車具の形容として、「金車、𦉳較、朱𦉳輓、斬、」〈三年師兌筮〉『集成』4318.2)や、「金車、𦉳輓朱𦉳輓、斬、虎𦉳熏裏、𦉳較、」〈呉方彝蓋〉『集成』9698)等がある。②單育辰はこれを「漆」とする。假借字である。「𦉳」は莊母脂部・阻史切 (B-S: \*[sji]・OCM: [siʔ)、「漆」は清母質部・親吉切 (B-S: \*[sʰi]it)・OCM: [sʰit)であり、莊母と清母はともに齒音、質部は脂部入聲であるので、音が近く通假しうる。「拜」の場合、幫母月部である。つまりこの字は、「一形多讀」のいわゆる轉注の字である。

「辟」は君主や法の意を表すが、ここではいわゆる「辟雍」の池を指す。〈麥方尊〉には、「翌日、才(在)璧(辟)黼(雍)、王乘𦉳(于)舟」【翌日、辟雍に在り、王舟に乗る】とある。璧玉の形のように圓

く周りを擁くように取り巻く池水である。「辟舟」はそこに浮かべた儀式用の舟をいう。王の舟ではない。

「舟龍」は、龍の彫刻が施された舟とする説もあるが、それでは語順が逆である。「龍」を②劉雨は「壘」の假借として、舟に乗り降りするための水面より少し高くなった所とする。つまり船着き場である。棧橋ではなく、盛土か石積みであろう。この説に従う。

なお②劉雨は、「奉」字で斷句し、「臨」の主語を辟舟として、辟舟が舟龍に「靠臨」している「舟が船着き場に着く」意に取る。はたして物が「臨」の主語となるのであろうか。例えば、後世の文獻に、「平原君家樓、臨民家」(『史記』平原君列傳)など、擬人的用法が見られるが、ここではやはり王の動作と見るべきであらう。ただし、王が船着き場を見下ろしたとは考えにくい。後文にも「臨奉白旂」とあり、旗を見下ろすとは取れない。この「臨」は、高處から見るのではなく、下に降りる移動や接近することを表し、特に高貴な者がその場に來ることをいう。⑤武振玉(頁一二)は、この「臨」を、「蒞臨義」と説く。つまり王が船着き場に近づきそこに立ったのである。

「臨」字の金文での用例は、この〈伯唐父鼎〉の外には、「見下ろす」意の以下の四例と人名のみである。一、「天異(翼)臨子」【天は子を庇い見守る】〈大孟鼎〉集成2837(西周早期)。二、「臨保我有周」【我が周を見下ろし保護する】〈毛公鼎〉集成2841(西周晚期)。三、「臨保我又(有)周」【同上】〈師詢簋〉集成2842(西周晚期)。四、〈獄簋〉「用勾百福、萬年俗(裕)茲百生(姓)、亡不窳臨降(逢)魯」『考古

與文物』二〇〇六年第六期（西周中期）。第四例は難解であるが、この「臨」も天から地上を見下ろす意に取れる。

ついで、「威奉（拜）」とある。「威」は動詞では、その行爲をすべて遣りつくすこと、完了することである。②武振玉（頁四二）を参照。前掲の〈麥方尊〉には「死（司）威」【司威はる】とある。さらに轉じて、範圍副詞として動作の主體や對象すべてを包括する意味を表す。「盡く」「悉く」「皆」と訓じる。また時間副詞として動作が終了していることを表し「既に」と訓じる。②武振玉（頁六一〜六四および、頁九一〜九三）を参照。

②武振玉はこの〈伯唐父鼎〉の「威奉」を、時間副詞の例として擧げる。しかし、王は舟に向かって拜禮してから乗り場に進んだのであるから、わざわざ拜禮が終わったことをいう必要はない。この「威」は範圍副詞である。では參列者全員が拜禮したのか、それとも王が全ての舟に拜禮したのか。たしかに辟舟は一隻のみではない。〈麥方尊〉に、「侯乗𠂔（于）赤旂舟從」【侯は赤旂舟に乗りて從ふ】とあるように、幾隻か浮かんでいた。しかし舟に拜禮してから船着き場に進んだ王がまた拜禮するとは考えられない。主語は參列者である。王の後ろに従う者たちがみな拜禮したのである。また、⑦高澤は「奉するを威はる」と讀むが、「奉」は單なる拜禮であつて、わざわざ終わらせるような複雑な一段の行爲などではない。

白（伯）唐父告備（備）、王各（格）乗辟舟、臨奉（拜）白旂、

伯唐父が準備完了を伝えると、王が舟に乗り込み船上の白旗に向かって拜禮した。

「伯唐父」という人名は他の金文には見えない。墓主と見られる「孟員」との関係も未詳「後述」。彼がこの射禮の準備擔當を勤めたのであろう。首尾よく勤め上げ、終わって褒賞を頂くことになる。

「各（格）」は、「至る」と訓じて移動・到達をいう。ふつう場所目的語を取る。金文では「王各（格）大室」等のように、王が儀禮の場に到着することをいう例が数多い。ここでは船着き場から辟舟への移動をいうことになる。「乗」と表現するだけで充分であるのに、なぜわざわざ至ることをいうのか不明。

「乗」字を、◎簡報は「壺」に、④『近出』・⑤『張家坡』は「奉」に、⑥『新收』は、「乗+皿」（乘）に隸定しているが、拓本では確認できない。②劉雨も「乗+皿」とするが、①張政烺を初めとして他者は「乘」と釋しており、文意にも合うので、「乗」とする。

「臨」は先に述べたように、移動する動作、接近することをいう。王は舟の上の白旗に近づき、それに向かって拜禮した。「白旂」は金文ではこののみ、他例を見ない。なぜ白旗なのかは不明。拜禮しているからには尊崇の對象である。②劉雨は、「武王伐紂の時に用いた『大白之旗』の類であろうか、歴代の王はみな白色を用いた」という。前掲の〈麥方尊〉には、「侯は赤旂舟に乗りて從ふ」とあり、この時に王の乗った舟の旗が何色であったのかは記載がない。五色それぞれの舟が用意されていたのであろうか。また車具の「朱旂」は金文での下賜物に常見する。

④夏麥陵は、この射禮を弓技を競うものと看做し、審判が競技開始の合圖として白旗を振ったと解釋する。この射禮は競技ではないし、「奉」を旗を振る意には取れない。

用射綵<sup>彩</sup>（勒）虎・貉・白鹿・白狼于辟池、

王は舟を移動させながら犠牲の動物を次々と弓で射た。

「綵<sup>ちんり</sup>」の二字が難解である。犠牲の動物の名か、あるいはそれを形容する語のはずである。

「綵」の字を①張政焯は「兕」とするが、②劉雨以降の注釋はほぼ「綵」とするのでそれに従う。そもそも「兕」がどのような動物なのか不明である。『説文』卷九下・兕部によれば、兕は「如野牛、青毛、其皮堅厚、可制鎧」とあり、弓で射殺せるようには見えないので、射禮の犠牲として相應しくない。

牛の鼻綱を表すこの「綵」の字を、②劉雨は牛牲の代稱とする。『周禮』地官・封人に、「凡祭祀、飾其牛牲、設其福衡、置其綵、共其水槁」【凡そ祭祀、其の牛牲を飾るに、其の福衡を設け、其の綵を置き、其の水槁を共にす】とあり、鄭玄は鄭司農を引いて、「綵、著牛鼻繩、所以牽牛者、今時謂之雉、與古者名同」【綵、牛鼻に著く繩、牛を牽く所以の者なり、今時に之を雉と謂う、古者の名と同じ】とあるのに基づくという。しかし牛は家畜であり、後ろには野生動物が並んでいる。また牛を犠牲にするのであれば、初めより牛刀を使うはずである。この解釋は無理である。

「羴」を①張政焯は動詞とし、『説文』卷三下・支部の「羴、圻也」に基づき、動物を分置した意とする。しかし犠牲の動物を配置したのは、先に「備」れりと宣告した伯唐父であろう。文意と合わない。字義も「裂ける・開く」意であり、金文に「分置する」意での用例はない。②劉雨は、虎と合わせた二字で犠牲の動物の一つと見て、斑紋のある虎とする。しかし根據を示していない。また④夏麥陵は、「羴」は「狸」の假借とする。そうすると下文の「貉」と重複することになる。また⑧王・張も二字を分け、「羴」と隸定するが、語釋がない。

いま二字を犠牲に係る修飾語と見る。「綵」は字義どおりに鼻綱であり、後世「紉」や「雉」とも書かれる語。家畜や動物を繋ぐ繩のことである。ここでは牛ではないので、首に捲いたのであろう。次に、「羴」は金文でよく「賚」の通假、「賜う」の意として使われる。ここでは「勒」の假借で「くつわ」を表すとすれば、文意にも合う。「羴」「賚」の上古音はともに來母之部、「勒」は來母職部（之部入聲）で音が近い。「羴」と「勒」との通假例は他に見いだせないが、近似音である。この三字の擬音はそれぞれ、B-Sでは\*[r]a・\*[r]yaks・\*[r]yok、OCMでは\*ra・\*rakh・\*rakとある。つまりこの二字で、動けないように繩で杭に繋がれ、噛みつけないようにまた吼えないように、くつわを噛まされていることを描寫する。虎だけでなく犠牲全体を修飾する。

「貉」はたぬき。むじなともいう。

「白鹿」と「白狼」のみ白いのはなぜか。たまたま捕獲できたからであろうが、白色を神聖視していたのが窺える。④『近出』前言で劉雨は、『史記』周本紀と『國語』周語に、穆王が犬戎を征伐し、「四白

狼・四白鹿を得て以て歸る」と載るのを引き、「穆王は珍奇な白狼や白鹿を寵愛はしたが、伯唐父鼎の犠牲がその時のものと巧く附合する譯でもないだろう【也許竝非巧合】という。

これら犠牲は、すべて生きている實物である。前述したように池畔にそれぞれ杭をうち繋がれていた。王は舟を移動させながら、一頭ずつ射たのである。これらの動物を描かれたとし「水射賽」とする④夏麥陵の説もあるが、射技を競う射禮を行なっているのではない。それならば射技の優れた者に、下賜が行われるはずである。活きた動物を弓で射た後に犠牲として進獻したのであろう。

咸、唐父蔑（蔑）曆（歴）、易（賜）秬鬯一卣（卣）・貝廿朋、對揚王休、用乍（作）安公寶賻（尊）彝

「咸」はここでは動詞である。弓射が終わって、準備を整えた伯唐父に褒賞が與えられた。

銘文七行目の冒頭を、①『張家坡』や、①張政娘・⑦高澤は「唐父蔑歴」とし、一方、②劉雨・③劉桓・⑥袁俊傑などはこの部分を「萃、王蔑歴」とする。拓本は不鮮明であるが、「蔑歴」の上の二字は、以下に述べるように語意・語法の面から見て、「唐父」と讀むべきである。

まず⑦高澤は、

王を主語とした文では、「王蔑某歴」または「王蔑歴于某」と書くのが通例で、蔑歴の對象者を省くことはない。王を省いて對象者を主語とした場合には受動態に讀む。よってこの場合、伯唐父

を主語として受動態に讀むのがよい。

という。「蔑歴」の句法は、⑤武振玉（頁三二）によると、四九例あり、多数が「主語＋賓語」の形式であり、主語は受事者で、受動文である。少数が「蔑歴」の後に受事賓語をとめない、あるいは前文を受けてそれを省略する。また「蔑……歴」形式が二四例、「蔑」の單用が五例あるとする。

また⑦鞠煥文によれば、五五例あって下記のいずれかになる。いま施事者をA、受事者をBとし、順序を変えて示す。

- 一、A蔑B歴…三二例      二、A蔑歴B…四例
- 三、A蔑B…二例      四、B蔑歴…一五例
- 五、B蔑歴于A…三例      六、蔑歴…一例

A（施事者）の身分は必ずB（受事者）より上位である。

⑤武振玉と⑦鞠煥文の論はどちらも、〈伯唐父鼎〉のここを、「唐父蔑歴」（B蔑歴）として算えているようで、「王蔑歴」（A蔑歴）のみとなる句形はないとする。つまり「唐父が蔑歴された」のである。

ただし排行の「白（伯）」が略されている。同一銘文中において排行有無の二つの名が共存する例は他にもあり、例えば〈仲辛父簋〉集成二〇二二（西周中期）に、「中（仲）辛父乍（作）……、辛父其萬年……」とある。③松井嘉徳（頁一八一）を参照。

「蔑歴」は金文に習見の語であるが、後世の文獻に類似する表現が見えない。①佐藤（頁一五七）は、「目上の者が目下の者の功績を、その父祖の事績と關連つけて述べることではないか」とする。近年②陳劍は、この下字を「懋」と釋する説を提示している、

所謂「蔑曆」の「曆」は、おそらく「懋」と釋すべきであろう。「蔑」は「被」と義が近い。最もよく見られる「A（上級）蔑B（下級）懋」類の辭例は、典型的な二重目的語構造であり、意味は「AがBに勵ましを更に與える」である。そしてその變形の「B蔑懋」あるいは「B蔑懋（于）A」は、「Bが（Aからの）勵ましを受ける」意味である。【所謂「蔑曆」之「曆」、可能應該釋讀爲「懋」；「蔑」與「被」義近；最常見的「A（上級）蔑B（下級）懋」類辭例、是典型的雙賓語結構、意爲「A覆被B以勉勵」；而其變式「B蔑懋」或「B蔑懋（于）A」、則爲「B受到（A的）勉勵」義】

さらなる検討が必要であろう。今は従來の説に従い曆（歴）を「經歷」の意に取り、「蔑曆」を功績を稱える意に解しておく。

「柎鬯」は合文となっている。「柎」はくろきび、「鬯」は鬱金草、兩者で作った酒をいう。「卣」は量詞、容器一つぽ。子安貝の束の數を、  
 ㉟『簡報』・㊸『銘圖』は「五」、㊹『近出』・㊺『新收』・㊻『張家坡』は「廿」とする。これも拓本では判別できないが「廿」としておく。  
 なお「一朋」は王國維によれば、貝十個である。「說玉朋」〔《觀堂集林》卷三〕に、「古制貝玉、皆五枚爲一繫、合二繫爲一珪、若一朋」〔古、貝玉を制るに、皆な五枚を一繫と爲し、二繫を合はせ、一珪若しくは一朋と爲す〕とある。

「對揚王休」も金文習見の表現。王の恩寵に謝意を表し稱揚すること。「安公」は㊼『近出』に従う。他書は「□公」としているものが多い。伯唐父の先公の名であろう。

訓讀

乙卯、王 荅京に饗す。王、辟舟に拜し、舟壘に臨み、咸拜す。伯唐父、備はれりと告ぐ。王 格りて辟舟に乗り、臨みて白旂に拜す。用て綏勒の虎・貉・白鹿・白狼を辟池より射る。咸はる。唐父、蔑歴せられ、柎鬯一卣・貝二十朋を賜はる。王の休に對揚し、安公の寶尊彝を作る。

現代語譯

乙卯の日、王は荅京にて饗祭を行った。王は辟雍の舟に拜禮して、船着き場に進み、みなも拜禮した。伯唐父が、「整いました」と告げた。王は移って辟雍の舟に乗りこみ、白旗に向かって拜禮した。そうして柎に繫がれ轡を噛まれた虎・貉・白鹿・白狼を辟池から弓で射た。終わると、伯唐父は功績を贊えられ、柎鬯一壺と貝二十朋を賜わった。王の恩寵に應えて、安公のための寶の禮器を作った。

參考

以下に同墓（陝西省長安縣長家坡M一八三）より出土した他の四器を取り上げる。墓主は孟員と考えられるが、伯唐父との關聯は未詳。

器名

- a 〈孟狂父簋〉
- b 〈孟員鬲〉（孟狂父鬲）
- c 〈孟員鼎〉（孟狂父鼎）
- d 〈父己爵〉

時代

- a 西周早中期 (昭王④袁俊傑)
- b 西周早中期 (昭王④袁俊傑)
- c 西周早中期 (昭王④袁俊傑)
- d 西周早中期

收藏

中國社會科學院考古研究所

著錄

- ① 『近出』：劉雨・盧岩編『近出殷周金文集錄』（中華書局、二〇〇二年）  
a 第二冊・430、b 第一冊・164、c 第二冊・338、d 第三冊・813
- ② 『新收』：鍾柏生等編『新收殷周青銅器銘文暨器影彙編』（藝文院書館、二〇〇六年） a 695、q 696、c 697、p 699
- ③ 『簡報』：中國社會科學院考古研究所灃西發掘隊「長安張家坡 M183 西周洞室墓發掘簡報」（『考古』一九八九年六期）
- ④ 『張家坡』：中國社會科學院考古研究所編著『張家坡西周墓地』（中國大百科全書出版社・一九九九年）頁一三二～一六七
- ⑤ 『銘圖』：吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』（上海古籍出版社、二〇一二年） a 第九卷・439、b 第七卷・338、c 第四卷・2186、p 第一五卷・7607

考釋

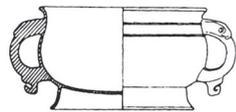
- ① 張政烺「伯唐父鼎・孟員鼎・孟員鼎銘文釋文」（『考古』一九八九年第六期）。後に、『張政烺文史論集』（中華書局、二〇〇四年）頁七八四～七八七、及び『張政烺文集 甲骨金文與商周史研究』（中

華書局・二〇一二年）頁二三四～七に再録。

- ② 商艷濤「金文札記四則」三、孟員鼎／鼎（『漢字研究』第一輯・學苑出版社、二〇〇五年）
- ③ 高澤浩一編『近出殷周金文考釋』二（研文出版、二〇一三年）孟員鼎、附孟員鼎

參考文獻

- ④ 唐蘭「論周昭王時代的青銅器銘刻」九・員卣（『古文字研究』第二輯、中華書局一九八一年）。後に、『唐蘭先生金文論集』（紫禁城出版社、一九九五年）頁二三六～二九五に再録。
  - ⑤ 袁俊傑「西周金文中的射牲禮儀——伯唐父鼎與辟池射牲禮」（『兩周射禮研究』（科學出版社、二〇一三年）第二章・第一節二、頁一五五～一六九
  - ⑥ 胡長春「新出殷周青銅器銘文研究」（安徽大學、二〇〇四年、博士論文）三、新出金文簡釋一八九・孟狂父卣。後に、『新出殷周青銅器銘文整理與研究』（綫裝書局、二〇〇八年）上編として出版。
- a <孟狂父簋> 器制
- 圓口が外に廣がり、卷沿、圓唇、束頸、圓腹、圓底。短い圈足。腹側に環狀の雙耳がつく。耳には浮彫のような獸頭があり、耳の下に卷いたような小珪がある。腹の上部に二本凸弦紋がある。口徑19.3cm、腹徑19.2cm、腹深10.0cm、圈足下口徑15.6cm、通耳寬25.8cm、高12.2cm。①『張家坡』



⑧『新收』

銘文 腹内底に、二行六字

孟狴(狂)父乍(作)旅設(簋)

「狴」の旁は、「止」に従い「王」の聲、後の「狂」字に當る。原義は狂犬であるが、聲が大きいことから、さらに聲望が振るう意となるので、人名に使われたのであろう。

旅簋は、遠征などに帶同する簋の意。

訓讀

孟狂父 旅簋を作る。

現代語譯

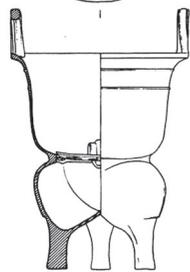
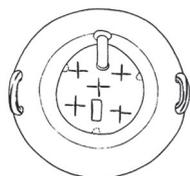
孟狂父が旅簋を作った。

b 〈孟員甗〉器制

上部が甗、下部が鬲。甗部の口は正圓形。開いた口で、卷沿。沿上にねじれた形の耳があるが、切斷面は方形。腹は直線で深い。鬲部は圓鼓腹、襠まは高く、圓柱形實心の長足。甗と鬲は一體に連なり不可分



⑨『新收』



銘文 甗部の腹内壁に、四行二〇字(合文一字を含む)

孟狴(狂)父休于孟員、易(賜)貝十朋、孟員𠄎(則)用乍(作)𠄎(厥)寶欣(旅)彝

で、間は束腰。腰部内には環状の内蓋と簧すとがあって、ともに上につまみがあるので取り外すことができる。簧はほぼ残り、五つの十字形の穴がある。甗の頸部に二本凸弦紋がある。鬲部は無紋。口径26.8cm、腹深15.6cm、通耳高40.3cm。(⑨『張家坡』)

考釋

「休」は恩寵を施すこと。名詞で使うことが多いが、ここでは動詞。「于」を伴って対象者を導く。「恵む」と訓じる。「賜」は具體的に物品を與えることを表す。①張政娘は以下の用例を擧げる「表記は一部改めた」。

相侯休于厥臣爰、賜帛金、【相侯、厥の臣爰に休み、帛金を賜ふ】〈相侯殷〉集成 4136 (西周早期)

侯休于耳、賜臣十家、【侯、耳に休み、臣十家を賜ふ】〈耳尊〉集成 6007 (西周早期)

また「休」一字で二重目的語をとる場合がある。

召公建匱、休于小臣釐貝五朋、【召公、匱を建て、小臣釐に貝五朋を休む】〈小臣釐鼎〉集成 2556 (西周早期)

趙(遣) 叔休于小臣貝三朋・臣三家、【趙(遣) 叔、小臣に貝三朋・

臣三家を休む】〈易旁殷〉集成 4042、4043 (西周早期)

②商艷濤は下記の二例を追加している。

伯犀(遲) 父休于縣妃曰、【伯犀(遲) 父、縣妃に休みて曰く】〈縣妃殷〉(縣改殷) 集成 4269 (西周中期)

唯天子休于麥辟侯之年鑄【唯れ天子、麥の辟侯に休むの年に鑄る】〈作冊麥方尊〉集成 6015 (西周早期)

②商艷濤はさらに、器名は作器の名を准とする原則に従えば、〈孟員甗〉と名づけるべきであり、「孟狂父休于孟員」を受身に【孟狂父、孟員に休せらる】と讀んで、〈孟狂父甗〉〈孟狂父鼎〉と呼ぶのは誤りであることも指摘している。

孟狂父が「休」して貝を下賜していることから、孟氏一族の長老であり、孟員はその族子弟である。墓主は孟員と見られ、◎『簡報』によれば、年齢二五〜三〇歳の青年男性とある。戈や矛など武器とともに葬られていた。

孟員について⑤袁俊傑(頁一六九)は、

張家坡出土の窖藏青銅器の中に三件の〈孟簋〉【集成 4162、4163、6164 (西周早期)】「孟曰、朕文考眾毛公・趙(遣) 中(仲)

征無需、毛公易(賜) 朕文考臣、自罕(厥) 工(功)、對揚朕考易(賜) 休、用壺(鑄) 茲彝、乍(作) 罕(厥)、子子孫孫其永寶」

があり、その銘文は、孟の父がかつて毛公と遣仲に隨つて東征し、功を立てたが陣歿し、孟が代わりに賜を受けたことをいう。〈孟簋〉

諸器の時代と、〈孟狂父簋〉〈孟員鼎〉〈孟員甗〉の時代は近く、一方は墓葬、一方は窖藏ではあるが、二者の距離は近いので、と

もに孟氏家族の銅器であるに違いない。孟員は軍人家族の出である。傳世の員組の銅器に、尙・尊・鼎・壺・盃・觶などがあり、

その中の〈員尙〉【集成 5387 (西周早期)】「員從史旃(旗) 伐會、員先入邑、員孚(俘) 金」には、員がかつて史旃に從つて東夷の

會國を征伐し、金を俘としたことを述べている。また〈員鼎〉【員方鼎】集成 2695 (西周早期或中期)】「唯征(正) 月既望癸酉、

王獸(狩) 于眠(視) 敵(林)、王令(命) 員執犬、休善、用乍(作) 父甲鬻彝、罍」の銘文は、員がかつて周王の巡狩に隨從したことと述べる。④唐蘭は員組銅器を昭王の時代とする。年代と身分事績が一致するので同一人物である。そして〈伯唐父鼎〉は遠征中

に得たのであろう。

として、昭王の時代の年若くして亡くなった武人とする。同書（頁一五六）は、〈孟狂父簋〉〈孟員鼎〉〈孟員鬲〉の形制の特徴からは、康王晚期から昭王の時代とし、墓葬の年代を穆王初年とする。

先に〈伯唐父鼎〉の年代を穆王初年とした。孟員は没する直前に〈伯唐父鼎〉を何らかの経緯で入手したのであろう。遠征中とは限らないであろう。二人の関係は未詳とするしかない。

「𠄎」字を、④『近出』は「對」とする。文脈から見れば、「對揚」の「揚」の方が相應しい。〈麥方尊〉の「麥揚、用乍（作）寶障彝」など、「用乍」の上に「揚」が来る例は幾つかあるが、「對」が置かれる用例は金文に見えない。

この字は〈孟員鼎〉では、「𠄎」となっており、「刀」旁が加わる。

①張政烺は、「これは形聲字であり、刀が形符なので、省いても讀音は變らないであろう」【蓋此是形聲字、刀是形符、省去而讀音不變】という。それを受けて、②商艷濤は、この字を先に⑥胡長春が「則」と釋したのに従うべきであろうとする。今この説を採る。

### 訓讀

孟狂父 孟員に休し、貝十朋を賜ふ。孟員則ち用て厥の寶の旅彝を作る。

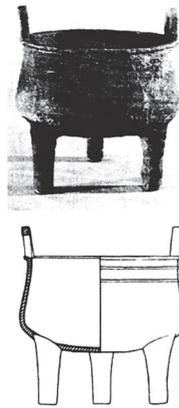
### 現代語譯

孟狂父が孟員に恩恵を施し、貝十朋を下賜した。孟員はそこでその

寶の旅彝を作った。

### c 〈孟員鼎〉器制

口は圓桃形、狭い平沿で、内に折れ曲がる。耳は上が弧形をなし、長方形の穴があく。上腹は斜直線で、下腹が膨らみ、圓い底。柱状の足は上が太く下が細く。切斷面は圓形。頸部に二本凸弦紋がある。口徑20.8㎝、腹徑21.6㎝、腹深12.1㎝、通耳高24.4㎝。（①『張家坡』）



(B) 『新收』

銘文 腹内壁に、四行二〇字、甌と「罙」字のみ異なる他は同文。

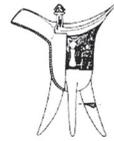
孟狴(狂) 父休于孟員、易(賜) 貝十朋、孟員罙(則) 用作(作) 孚

(厥) 寶欣(旅) 彝

d 父己爵 器制

前流後尾、流が折れる所に二本の菌柱が立ち、卵形の腹が、やや深く、一側に牛頭形の鑿(紐穴)があり、三本の足は刀状。腹身に二組の饜鬢紋があり、地を細い雷紋が取り囲む。通行13.5cm、流から尾までの長さ15.8cm。銘文は、一柱の側面にある。(◎『簡報』)

銘文 父己



(B) 『新収』

墓主の孟員その他の人物との関係は不明。

(大阪工業大学客員教授・

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員)